

第九七回子規忌法要

明治二十八、九年の子規の漢詩について(下)

柳原極堂の子規への思い

子規の習作期の短歌(一)

..... 一

谷 光 隆 三

二 神 將 三

泉 寔 三

子規會誌

七九号

平成十年
十月

例会記録

○平成一〇年七月例会（第六六六回）

七月一九日（日曜日）正宗寺本堂 出席者 三二名
講演「子規におけるミーメーシス（模倣）」

会員 泉 憲氏

子規の短歌習作期の作品に見られるミーメーシス（模倣）の重要性についての講演であった。子規の習作期の作品と、その際子規が手本とした指導者や古典の作品と比較しながら、それが単なる外面的な模倣に止まらず、文学精神の習得に、大いに役立っていることを、多くの実例に基づいて論証された。久々の短歌についての講演であった上に、美学的な視点からの論究であったので、新鮮な感銘を受けた。

○平成一〇年八月例会（第六六七回）

八月一九日（水曜日）正宗寺本堂 出席者 三二名
講演「子規・極限の世界（四）―執筆の自由―」

副会長 越智 通敏氏

死を予感した明治三〇年夏の「病中二句」に始まり、明治三五年九月一九日の臨終に至るまでの作品を通じて、病苦で極限状態にあった子規が、いかにこれを克服し、「如何なる場合にも平気で居る」精神の自由を得たかを、詳しく述べられた。「余の暇を得て心に文事に専にするを得る者蓋し疾病の賜なるか」と病苦を前向きに受け取り、

明治三四年三月一五日の「墨汁一滴」に述べている「執筆の自由」に生きる子規の精神の強韌さについて力説された。

○平成一〇年九月例会（第六六八回）

九月一九日（土曜日）正宗寺本堂 出席者 八一名
子規忌法要

「子規旅立ちの像」除幕式（子規堂前）

講演 「病牀に生きる子規の願望」

―短歌「足なへ」「足たたば」の表現―

松山子規記念博物館館長・幹事 長谷川孝士氏

（要旨） 子規博前の歌碑に刻まれている「足なへの病いゆとふ伊豫の湯に飛びても行かな驚にあらませば」の短歌は、子規自筆稿「竹乃里歌」によれば、初稿は「足なへの病いゆとふ伊豫の湯に飛びても行かん驚ならませば」であり、それをさらに「足なへの病いゆとふ伊豫の湯に飛びても行かな驚にあらませば」と改めている。「万葉集」の表現に近づけようと努力している跡がよくうかがわれる。「足なへ」を用いた短歌は、明治三一年六月から明治三三年秋まで八首あるが、年を追って、子規の内面が微妙に変化していることが分かる。明治三一年八月には、「足たたば」八首を作っているが、そこにみられる覇気のようなものが、死の予感とともに次第に沈潜していったといえよう。明治三四年五月の「しひて筆を取りて」一〇首をみるといっそうそれがよく分かる。「墨汁一滴」（明治三四年一月三日）にも、「人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確実になるならひなり。」と記している。

第九七回子規忌・物故会員法要並びに子規像除幕式

墓前 子規埋髮塔前

〔子規旅立ちの像〕除幕式 子規堂前

本法要 正宗寺本堂

司会 副会長 浦屋 薫氏

法要読経 正宗寺法務統括住職 田中 義雲師

子規遺作朗詠 尺八演奏 会員 桐間 龍芳氏

漢詩「稲川南嶺の東都に在るに寄す」

短歌「足なへの」 会員 渡辺 泰山氏

俳句「辞世三句」 会員 永田 麗扇氏

献詠披講 会員 松本 松陽氏

焼香 会長 和原 茂樹氏

遺族代表 佐伯 徹也氏

来賓・役員・有志

会長挨拶 会長 和田 茂樹氏

閉会のことば 副会長 浦屋 薫氏

献詠

歴日の深き思ひや頼祭忌 足立 青峯

風すしに祭壇並ひ子規忌かな 安藤 茂子

語りかく若き眉目や頼祭忌 石丸 律子

旅立ちの像に涙し子規祀る

旅立ちの子規の像見ゆ萩の寺

子規さんの横かほ一途祀けり

禅寺の雨後の清しき子規忌かな

正宗寺に相寄る顔や子規まつる

予の国の裔に生れて頼祭忌

糸瓜忌の夜来の雨のあがりけり

規漱極三人掛けて子規まつる

注連さわぐ城山おろしや新能

御所柿に幟立ちたり庄屋門

頼祭忌旅立ちの像除幕式

子規極堂語る堂縁秋しぐれ

秋灯やひもとく子規の新刊書

八月会目頭に涙絶筆句

仏海も朝寒顔の子規忌かな

夢の中で柿喰っている子規忌かな

白萩のこほれ座右に散策集

子規忌法要供物御礼

清酒

果物 糸瓜・鶏頭 故三井 清氏御遺族

道後せんべい

乾 燕子

井上 松恵

小原 伸記

菊池 寿美子

敷村 久良子

田井野 ケイ

同 春美

橋 貞子

玉井 国重

友近 桂子

土居 茂女

永田 好乃

平松 頼行

宮田 耕一路

山本 数子

同

和田

仲川 幸男様

石丸 律子様

橋 英司様

玉泉 堂様

子規「旅立ち」の像

第九七回子規忌に合わせ、「子規『旅立ち』の像」の除幕式が、正宗寺境内の子規堂前に、子規会会員および市民約八〇人が参列して行われた。

正宗寺の檀家総代理曾我光四郎氏は、一年前古稀を迎えるに当たり、正宗寺に「子規『旅立ち』の像」の建立を発願し、田中義見住職とともに、今治市在住で愛媛県美術会常任評議員の阿部誠一氏に制作を依頼された。像は、総工費一千万円で、一年をかけて完成された。

除幕式では、子規会の和田茂樹会長、浦屋薫副会長それに発願者曾我氏のお孫さんの手によって除幕され、子規会会員小原伸記氏が、会員の献句「旅立ちの像に涙し子規祀る 燕子」「瀬祭忌旅立ちの像除幕式 桂子」の二句を詠み上げ、子規をたたえた。

中およそ八十七センチ、高さ九十七センチのブロンズ像は、子規が、明治一六年六月一〇日正午、大志を抱き東京に向かって、いままにわが家から旅立ちとうとしている姿を表現したものである。この大志は、後に、短歌・俳句・文章の改革を成し遂げた子規の偉業につながるもので、高さ八十七センチの黒御影石の台座には、題額「旅立ち」の下に、英文で Siki Masaoka, the greatest haiku poet, about to leave to study literature. と刻まれている。子規堂玄関前に建てられた意義もここにある。点字の説明もつけられており「この像を見て、また直接触れて、人生に旅立ちとうとする若い人たちに夢を持ってもらいたい。」というのが曾我氏発願の趣旨である。

制作者阿部誠一氏は除幕式後の挨拶で、「田中住職と曾我氏から

直接依頼を受けた時は、彫刻家冥利に尽きる思いがした。しかし、

子規堂とのバランスや色彩的コントラスト、旅立ちのための笠や振り分け荷物の配置などを考慮し、制作にはたいへん苦心した。今日あらためて出来映えを見て、これらの問題を克服できたのではないかと満足している。」と語っている。また、「旅立ち」の像は、明治二五年一〇月、子規が箱根路を越える途中、うずくまって草鞋を履こうとしている時の写真を基に、子規の様々な写真を参考に創作されたが、後ろ姿の写真はなかったので、背面から見た姿は、阿部氏が想像して造型したということである。

この度「子規『旅立ち』の像」が完成したことで、活動の軌跡を伝える「子規堂」と「子規埋髪塔」と合わせて、子規の全生涯がふるさとのゆかりの地に、集約されたとと言えるだろう。



明治二十八、九年の子規の漢詩について（下）

谷 光隆

五 子規と寒山詩・正岡行

1 寒山詩

前章では、子規の詩に寒山詩の影響があるように言ったが、では、それは具体的にはどのように認められるだろうか。その最も直接的なものは、明治二十八年の「漢詩稿」のなかに¹ 寒山詩と題する五律二首があることである。すなわち

寒山詩 寒山に傲ふ

路到寒山尽 路は寒山に到つて尽き

寒山古木多 寒山 古木多し

風高断雞唱 風高く 雞唱断え

雲冷起樵歌 雲冷ややかにして 樵歌起こる

去来本無意 去来 本より意無し

向上竟如何 向上 竟に如何

又下寒山路 又 寒山の路を下れば

寒山古木多 寒山 古木多し

又

質我半檐屋

我に質す 半檐の屋

老婆貪而癡

老婆 貪りて癡なり

得錢無幾日

錢を得て 幾日も無きに

督促度三時

督促 三時に度る

我畏唯束手

我畏れて 唯手を束ぬれば

婆嗔欲燭眉

婆嗔りて 眉を燭かんと欲す

問婆若微我

婆に問ふ 若し我微かりせば

遷怒向阿誰

怒を遷すこと 阿誰にか向けん

というものであるが、試みに「寒山詩集」についてこれに類する詩を求めると、前者については、

人問寒山道 人 寒山の道を問ふも

寒山路不通 寒山には 路通ぜず

夏天水未积 夏天にも 水未だ积けず

日出霧朦朧 日出づるも 霧朦朧たり

似我何由屈 我に似るも 何に由りてか屈らん

与君心不同 君と心は同じからず

君心若似我 君が心 若し我に似たらんには

還得到其中 還た其の中に到ることを得ん

というのがあり、又

登陟寒山道 寒山の道を登陟れば

寒山路不窮 寒山 路窮まらず

谿長石磊磊 谿長くして 石磊磊

澗闊草濛濛 澗闊くして 草濛濛

苔滑非関雨 苔の滑らかなるは 雨に関はるに非ず

松鳴不仮風 松の鳴るは 風を仮らず

誰能超世界 誰か能く世界を超えて

共坐白雲中 共に白雲の中に坐せん

というのもある。共に第一、二句の句法が子規詩と相通することが

分かる。同様以後者（子規詩の第二首、貧我半擔屋……）につい

て寒山詩のなから類似の詩を求めると、

東家一老婆 東家の一老婆

富来三五年 富み来ること 三五年

昔日貧於我 昔日は 我よりも貧しかりき

今笑我無錢 今は 我が錢無きを笑ふ

渠笑我在後 渠は 我を笑ふこと後に在り

我笑渠在前 我は 渠を笑ふこと前に在り

相笑儻不止 相笑ひて 儻し止まざれば

東辺復西辺 東辺 復 西辺

というのがあり、又、この意に通ずる詩として

是我有錢日 是れ我が錢有りし日

恒為汝貨將 恒に汝が為に貨將す

汝今既飽暖 汝 今 既に飽暖にして

見我不分張 我を見て 分張せず

須憶汝欲得 須らく汝が得んと欲せしを憶ふべし

似我今承望 我が 今 望みを承くるに似たり

有無更代事 有無更代の事

勤汝熟思量 汝に勤む 熟々思量せよ

というのもある。前詩は老婆の貪欲を詠い、この点が子規の詩意と

共通しており、ことに「老婆」の語が共通していることは印象的で

ある。そしてこの詩は、世間一般の人情として、貧乏暮らしをして

いた時と、それが一旦金持ちとなった時とは、とかく心変わり

するものであることを風刺したものであるが、この点において後詩

は前詩と相通するものである。

ところで、ここでもう一つ注目すべきは、子規明治二十八年の作

である「蕪稿」のなかに、次のような詩があることである。

放言二首

咄汝非人類 咄汝は 人類に非ず

与禽獸無異 禽獸と異なる無し

以生商賈家 商賈の家に生るるを以て

不学交朋誼 交朋の誼を学ばず

貧時交自深 貧時の交は 自ずから深きも

黃白變其心 黃白あれば 其の心を變ず

吾無真社友 吾に真の社友無し

風月伴誰吟 風月 誰に伴ってか吟ぜん

これは前詩が真韻、後詩が侵韻で、それぞれ独立した五言絶句で

あるが、その詩意には一脈相通する所があり、金銭の有無による友情の変化を詰責している。「時態を譏諷して、能く流俗を警励す」といふ勸世詩は寒山詩の一大特徴であるが、子規の詩にこれが見られるのは極めて注目すべき所である。

なお、もう一つ明治二十九年の「漢詩稿」に、

空山

一路空山裡 一路空山の裡

寒院落葉声 寒林、落葉の声

欲尋幽石坐 幽石を尋ねて坐せんと欲すれば

漫漫白雲生 漫漫と白雲生ず

というのがあり、第三句に「幽石」があり、第四句に「白雲」があるのも注意すべきであろう。「白雲抱幽石」というのは、もと晋の謝靈運の「始寧の墅を過ぎりて」といふ詩のなかにある有名な一句（文選二十六）であるが、寒山詩のなかにも

重巖我卜居 重巖に 我れ卜居す

鳥道絶人跡 鳥道 人跡を絶つ

庭際何所有 庭際 何の有る所ぞ

白雲抱幽石 白雲 幽石を抱く

住茲凡幾年 茲に住むこと 凡そ幾年

屢見春冬易 屢々春冬の易るを見る

寄語鐘鼎家 語を寄す 鐘鼎の家

虚名定無益 虚名 定らず益無し

というがあり、「白雲抱幽石」は人口に膾炙する句である。子規の場合、この句は恐らく寒山詩より得たものであろう。

以上は、子規の詩のなかからとくに寒山詩に類似するものを選んで紹介したのであるが、断片的にはこれ以外にも相対比して検討すべき語句が所々に散見する。これを要するに明治二十八、九年の子規の漢詩には、五言詩もあれば七言詩もあり、どちらかと言えば五言詩への傾倒が目されるが、その五言詩には寒山詩の影響が少なからず認められることを指摘したのである。

なお、詩作とは別に子規と寒山詩との関係について、二補足すれば、私はかつて法政大学の子規文庫で和本の『寒山詩集』一冊を見たことがある。表紙は浅葱色で題簽に「原本寒山詩集 全」とあり、見返しには「重校懶祭書屋圖書」の蔵書印、下小口には子規の筆で「寒山集」と書き入れてあった。これが子規の手沢本であることを思うと、その襲蔵の意義は頗る大きいのである。

また、子規の隨筆である『墨汁一滴』は明治三十四年一月十六日に筆を起こし、同年七月二日に終わるものであるが、その三月十九日の条には、

病室の三方には襖が十枚あつて茶色の紙で貼つてあるが其茶色も銀の雲形も大方はけてしまふた。左の方の柱には古笠と古蓑とが掛けてあつて、右の方の暖爐の上には写真板の手紙の額が黒くなつて居る。北側の間半の壁には坊さんの書いた寒山の詩の小幅が掛つて居るが極めて洪い字である。どちらを見ても甚だ陰気で淋しい感じであつた。其間へ大黒様の状さしを掛けた。病室が俄に笑ひ出した。

とある。すなわち、子規の病室に坊さんの書いた寒山の詩の小幅が掛つていたというので、その坊さんと言うのは、或いは愚庵であつ

たかも知れないが定かではない。しかし、そこに子規の寒山詩への関心が窺われることは否定すべくもないであろう。

2 正岡行

前項では、明治二十八、九年の子規の漢詩のなかに時折、寒山詩の影響が見られる点を指摘し、これをこの時期の子規の作品の一つの特徴と考えたが、本項ではこれとは全く関係なく、この時期（明治二十八年）における子規の文学精神の高揚を示す一作品を取り上げておこう。それは「正岡行」と題する古詩で、もとは従兄佐伯政直にあてた書簡（同年八月七日付）のなかに近作一首として付記されたものであり、日清戦争に従軍後、しばし病を養った播津の須磨保養院より発信されたものである。

阿嬢在堂年五十 阿嬢堂に在り 年五十
鮮魚不薦帛不製 鮮魚薦めず 帛製ねず
妹年廿六嫁見去 妹 年廿六 嫁せども去てられ
裁衣煮菜家事助 衣を裁ち菜を煮て 家事を助く
吾素多病与世乖 吾素より多病 世と乖き
碌碌三十未迎妻 碌碌 三十 未だ妻を迎へず
阿嬢為兒憫孤寒 阿嬢は兒の為に 孤寒を憫れみ
兒為阿嬢悲無孫 兒は阿嬢の為に 孫無きを悲しむ
生不興家絶系譜 生れて家を興さず 系譜を絶つ
死何面目見父祖 死して何の面目あつてか 父祖に見えん
一任世人呼吾為猖狂 一に世人の吾を呼んで猖狂と為すに任せ
只期青史長記姓正岡 只期す 青史 長へに姓の正岡を記せん

ことを

病中の胸臆を訴える相手が同族の一員であつた為でもあろうか。そこにはまず母と妹と三人暮らしの貧しい家庭生活が写し出され、病身に妻帯することもできず、家系も断絶するであろう不孝を詫びた後、せめてもの償いとして文学史上に不朽の名姓を遺そうとする固い決意が謳われている。

儒教道徳に培われ、ことさらに孝心の深い子規には、一家に心を馳せ慈親に思いを致すような詩句が「漢詩稿」のなかに時々伺われる。例えば明治十六年の新年作に「一家笑酌元日酒」とあり、秋兩懐郷に「慈母在家砧々勤」とあり、歳晚書懷に「慈親為獨在郷里」便覺一年如百年」とあり、明治二十一年の秋日書懷に「想見萱草空寥落 夜夜闌門待兒婦」病軀憔悴業未成菽水何日奉茲闈」とある。また、明治二十九年の新年書懷奇某には「吾家有陰徳」とか「家名自是得」とかの句があり、寒廬には「阿嬢居于茲」五十未着緇絹 砧砧青燈下 裁衣閨針線」の句があり、寒厨には「塩梅小妹調 半孟母子茹」の句がある。さらに明治二十八年、「蕪稿」所載の閑居雜吟三十首を見ると、その中にも「官何折祿須求仕 家有鬢疎眉白親」の句がある。

「正岡行」の詩句はこれらと同工異曲、否、さらに一層深刻なものであるが、此の詩作製の本意は恐らくそこにはなく、却つて結束の二句にこそあるであろう。本詩は或る意味においては子規の自画像ともいえるものであり、子規の心の告白でもあるわけだが、自画像といつてよい詩にはこれより先、明治二十一年の作に「小照自題」

というのがあつた。すなわち

一幅写真鏡影同 一幅の写真 鏡影に同じ

如嘆如笑又如聲 嘆るが如く笑ふが如く 又 聲なるが如し

慶頭鼠目野人相 慶頭鼠目 野人の相

垢面塵衣乞丐風 垢面塵衣 乞丐の風

廉潔自呼小靖節 廉潔 自ら呼ぶ 小靖節

蠢迂未免旧阿蒙 蠢迂 未だ免れず 旧阿蒙

栄官高位非吾願 栄官高位 吾が願に非ず

不用留名麟閣中 用ひず 名を麟閣の中に留むるを

というもので、栄官高位を願いとせぬ旺盛な在野の精神が謳われて
いるが、「正岡行」には猖狂を自認するまでの闘魂、獅子奮迅の勢
いともいふ秀匪気が漂っており、前詩に比較すればその声調は一
オクターヴ高い。そこで以下には、その由つて来たる所の背景につ
いて少しく考えてみることにする。

そして、こうした子規の胸中を推し量るには、この時期の前後に
ものされた子規思い入れの書簡を併せ読むことが、便宜その理解を
助けることにならう。そういう意味で次の三つの書簡を紹介する。

その第一は、明治二十七年九月十日、石井祐治（露月）あての書簡で、

不遇歎ずるを用ゐず不幸愁ふるを要せず磊々落落として一世を
竟ふ是れ僅かに悟る者なり 不遇を不遇とせず不幸を不幸とせ

ず是非を一にし吉凶を等しく自ら此俗界に立ちて己レノ素志ヲ
貫ク者即ち是れ大悟徹底的の人物以て与に談すべきものと存候

小生頃者ますく感する処あり故に御一笑に供へ候

とある。第二は翌二十八年十一月二十四日、藤井乙男（紫影）に宛

てたもので、

小生持病は少し快く先月三十一日やうく帰京致候処その後神
経痛とか申ものにて足腰た、ず今に臥褥致居候 殊に数日来感
冒の気味にて熱発少シ昨今は書見写字も不叶不自由致候：小
生はいよ／＼やけなり文学と討死の覚悟に御座候 頓首

とある。第三は同年十二月、子規が虚子と道灌山に会談したのち、
十日頃、五百木良三（飄亭）に宛てたものである。

非風去り碧梧去り虚子亦去る 小生の共に心を談すべき者唯貴
兄あるのみ 前途は多望なり文学界は混乱せり 源語は読了せ
しや如何 俳句は出来しや如何 小説は如何 過去は如何 現
在は如何 未来は如何 一滴の酒も咽を下らず一点の鬢も之を
惜む 今迄でも必死なりされども小生は孤立すると同時にいよ
いよ自立の心つよくなれり 死はますく近きぬ 文学はやう
やく佳境に入りぬ 書かんと欲すれば紙尽く 喝ツ

この三つの書簡を通じて見ると、当時の子規は、不遇を不遇とせず
不幸を不幸とせず、己れの素志を貫く者こそ大悟徹底的の人物であ
るとし、また、死はますます近づいたと意識し、過去は如何、現在
は如何、未来は如何と百方思案を巡らすなかで、文学はようやく佳
境に入ったとして、文学と討死する覚悟を決めたのであつた。いわ
ば一生の分水嶺に立ったような心境であるが、また別に高浜虚子著
の「正岡子規」（甲鳥書林、昭和十八年、三五三—五三四頁）を見る
と、次のような注目すべき記述のあることに気付く。

明治二十七年位迄の子規は春風駘蕩たる感じであつた。常に
微笑を以て人に対するかの如き態度のやうに見受けた。何人も、

「升さん、升さん。」

と其膝下に親しみ集まるやうな傾きがあつた。

それが明治二十九年から後になつて秋霜烈日のやうな感じに一変化した。沈黙の後には恐ろしい皮肉な言葉を待ち掛けねばならぬやうになつた。

明治二十七八年といふ年は我が日本にとつても忘れられぬ日清戦争の年であつた。そうして我が正岡子規其人の一身上に於ても忘れる事の出来ない大きな変化のあつた年である。

つまり明治二十八年は、子規の生涯にとつて特別の意味を持つ大転換点であり、こうした身辺の自覚の上になつて詠まれたのが「正岡行」であろう。「正岡行」は病軀孤寒の文士子規が示した重大な決意の表明であり、その文学精神の高揚である。

余 説

前項で取り上げた「正岡行」は子規の自画像であり、又、自叙伝と言ひ換えてもよいものである。そして私は、これを病軀孤寒の文士子規が示した決意の表明であり、文学精神の高揚であると言つた。ここでは、それをさらに敷衍する意味で、「現代百人豪」のなかに見える子規像を付記しておきたい。

それは「正岡子規」と題し「無名氏」の執筆する所で、紙数は僅か二〇ページに過ぎないが、そのなかで筆者は、子規が文界に貢献した種々の業績を称賛し、芭蕉や周辺の人々との対比を交えつつこ

れを論じている。その間、自ずから子規の性情に触れる所も少なくないが、なかならず最もまとまつた記述と見られる所が前後二カ所にあるので、とりあえずその部分を抜粋して左に掲げてみよう。それは、

余は未だ君に接せず、然れども君が写真を見るに其貌とき眼、大なる頭、顴骨高くして厚き唇、一見神経質なるを知ると共に、何物をも包容して余裕あるの脳を有し且つ堅忍克己の氣に富めるをも知る。君が門下の士に聞くに大方余の想像に違はず、君は大なる神経質なり而して大なる克己力を有す、故に名は欲せざるにあらざり利も厭ふ処にあらざるべくも、其健全なる意志は之を抑制して漏らさずと、

とあるものと、
惟ふに君は所謂才子にあらざりて苦学の士ならんか、天稟の奇才にあらずして匪勉強の結果真成の奇才を得たるものならんか。才子の句は多くは精神にして時に邪道に陥り易し、碧梧桐氏がわからぬ句を作るといふの評あるは、其才あるが故なり。君は才なし、才あるも學びて得たる才なるが故に放縱ならず、偏頗ならず、温然として玉の如きものたり。

とあるものである。要するに子規は天性、神経質なところがあるが、「才」の人というよりも「学」の人であり、「堅忍克己」「匪勉強養」の人である。故に「名」は欲しない訳ではないが、其の健全な意志がこれを抑制しているのである、と言うのである。「一に世人の吾を呼んで猖狂と爲すに任せ 只期す 青史 長へに姓の正岡を記せんことを」の句意を解釈する上に一つの有力な参考資料とならう。

六 あとがき

本稿は、亡友渡部勝巳氏が「子規の漢詩と本田種竹」において、明治二十八年から翌二十九年にかけての二年が、子規の漢詩創作の面では最後の活動期であつて、二十六、七年に消えかかっていた漢詩の焰がもいちど盛んに燃えあがつたことは見のがすことのできない問題であるとし、その理由のひとつとして、本田種竹がいた、とされるのに対し、種竹以外にもその理由は考えられないかと思案し、子規周辺の事情と子規周辺の事情を検討して、前者では日清戦争に従事したことと故郷松山に帰つたことの二つを挙げ、後者では愚庵等をめぐる五言詩・寒山調ブームの存在を挙げたのである。

ところが、問題はもう一つある。さきに氏が、消えかかっていた漢詩の焰といったのは、「漢詩稿」だけで言えば、明治二十六、七年の彼の漢詩が、それぞれ二首ずつであることを言うのであるが、そればかりでなく氏は又、子規自身で「漢詩稿」に浄書整理した作品は、二十九年をもつて終わっている。明治三十年以後には、七首ほどの漢詩が別の原稿用紙から発見されるにとどまる。子規が晩年の六年間に、幼少のころから親しんで、彼の文学の最初でもあつた漢詩を、なぜほとんど捨てたかは、ひとつの問題である、とされるのである。本稿は、僅かながらこれにも答えるものとなつている。それが「正岡行」である。しかし、それはあまりにも間接的な表現であるから、この点に関しては今少しく説明を補つておく必要がある。明治二十九年三月十七日、大原恒徳にあてた子規の書簡を見ると、そのなかに左の一節がある。

俳士時々訪問致しくれ若し三四人落ちあふ時は小会杯催候 近
來は俳句無闇に出来其代り詩は丸で出来不申候

この書簡は、渡部氏が冒頭に引用された佐伯政直あての書簡と時期的にはさほど隔たりのないものと思われるのであるが、ここでは俳句が無闇に出来その代り詩は丸で出来ないと云つてゐる。そして、これは上記の問題を考える上において頗る暗示的な資料である。

というのは、子規の俳句革新の第一弾である「猥祭書屋俳話」は、明治二十五年六月二十六日より十月二十日まで新聞「日本」に連載され、翌二十六年五月二十一日、「日本叢書」の一冊として出版されたものであり（増補再版は二十八年九月五日発行）、その第二弾ともいふべき「俳諧大要」は、明治二十八年十月二十二日より其年の暮まで同じく新聞「日本」に連載され、三十二年一月二十日、「俳諧叢書」の第一編として出版されたものである。また、子規の句作は明治二十九年が最も盛んで、その年の俳稿は非常に分厚いものになつており、これに次いで翌三十年のものが多い。こうして見ると、「正岡行」は子規の俳句革新運動がその頂点に達した時期に詠まれたものであり、さきに私がこれを子規の重大な決意の表明といつたのは、外でもなく俳句革新の決意であつたと思われるのである。

そして、俳句革新への意欲が高まれば高まるだけ、漢詩の方からは自然、手を引くようになるので、明治二十六、七年の漢詩がそれぞれ二首ずつであつたというのも恐らくはその為であつたに違いない。また、そうした意欲は俳句よりさらに和歌へと以後も暫く変わることはないので、その点から考えると、この間に漢詩の作品が急

激に減つたのはむしろ当然のことであり、明治二十八、九年にその数が異常に増加したのは、上述のような特殊な事情に基づく言わば例外的現象であつたと思われるのである。

註

(23) 入矢義高『寒山』(中国詩人選集5)一五頁。

(24) 前掲書一一三頁。

(25) 但し、さきに寒山詩のキーワードとも言つた「白雲」という語などは、明治十四年以來多用されているが、それはごく普通の文学的修辭としてであり、とくに寒山詩の影響があつたものとは考えられない。

(26) 講談社版『子規全集』第十一卷 隨筆一所収。

(27) 『松羅玉液』(十二月二十三日)には、

つたなき発句などものすれば短冊にしたためてよと強ひらるるいなみも得ず、庵主能書なれば代りにその筆跡を得て帰るぬ。

とあり、また柴田宵曲は、

(子規) 居士は(愚庵)和尚の筆蹟に敬意を払ひ、手紙の来る度に誉めてゐたさうである。居士晩年の筆蹟には明に和尚の影響が認められるやうに思ふ。

と言つている(『子規居士の周圍』一八六頁参照)。

(28) 『子規全集』第十八卷 書簡一。

(29) 同右。

(30) 同右。

(31) 同右。

(32) 『現代百人豪』は、或る意味で特異な性格をもつ評伝であるから、これについて少し詳しく説明しておこう。この書物は明治三十五年四月〜八月の間に東京の新声社より発行されたもので、第一編より第四編にいたる合計四冊、各冊菊判百數十ページで、比較的薄手の仮綴本である。ただ、その第二編・第三編の巻末には「全部十二冊※毎月一回発行」とあるから、当初は合計十二冊を予定していたのであろうが、実際には四冊で発行が中止されている。

では、その理由は何であらうか。それは第一編巻首の序文の一節に、

此書題して『現代百人豪』といふ。如上の見地に立ちて、十指同じく指して人傑となすもの、眞価を剖判して刺さると共に、市井に伍し、岩窟に潜みて、其名現れざる人傑を世に揚げんことを期す。匹夫にして、百世の師たらんもの、此書の大に論ぜんとする所也。故に筆端の飛ぶところ、偽人の仮面剥けて地に落ち、不遇の傑士其名隆隆として現はる、ものあらむ。

とあり、また第三編の巻尾に、

来月刊行の第四編には巻頭伊藤博文論を掲げ並ぐに下田歌子論を以てす、二者の対照其間一点の靈犀相通するものあるが為か、二者共に宮中の恩寵を恣にして権勢当代の宦官を圧するが為か、知らず、只其論の如何に怪異の記述に富めるかを看よ。

とある点などから推察される。つまり、現存人物の眞価を剖判す

るといふ編集者の意図が、それはそれなりに問題を孕み、関係者の間に何かと不都合を生じたためであろう。現に第四編には予告の伊藤博文は載っていない。そういうわけで、合計四冊のなかに実際に収録されているのは次の人物である。

第一編

市川団十郎

近衛霞山公

大井憲太郎

尾崎紅葉

古川市兵衛

常陸山

妖僧雲照

大隈重信

三宅雄二郎

小村寿太郎

正岡子規

松本重太郎

芸者富子

本田庸一

第二編

第三編

貧民王

洪沢栄一

尾崎行雄

幸田露伴

橋本雅邦

大谷光瑩

守田宝丹

下田歌子

加藤高明

老佐佐兵衛

三遊亭円遊

藤田伝三郎

第四編

桐竹紋十郎

すなわち、「百人豪」と称して出発はしたもの、実際には右の二十七人で終わっている。しかし、企画の趣旨からも察せられるように、それはまことに個性豊かな人傑であり、そしてその中に「正岡子規」の名を見出すのも決して不自然ではなく、肯綮に

当たるものと言えよう。

さて、その「正岡子規」であるが、これを執筆したのは誰であるのか判然としない。筆者の署名がなく、ただ「無名氏」となっているからであるが、講談社版「子規全集」(別巻二 回想の子規一)の編注には、

筆者、無名氏とだけで署名はないが、池上浩山人氏が柴田宵曲からきいたところによれば佐藤紅緑であろうという。

とある。そして、この無名氏が本文を執筆した動機については、まず冒頭で、

今の所謂批評家なるもの其数実に多し、而も一言正岡子規氏に及ばざるは何故ぞ、

と問い掛け、子規が瀕死の床にあることを念頭に置いて、

余は批評家にあらず、而して特に子規氏を評する所以のものは他なし、此大詩人に対して天下の謝意を発表し置くの必要を認むると共に、氏が生前に於て其の門人が早くも注意すべき要点のあるを認むればなり。

と言っているのに徴して明らかである。

(33) 『子規全集』第十九巻 書簡二。

(34) 五百木飄亭の「夜長の欠び」(『子規全集』別巻二 回想の子規一)のなかに、

即ち二十七八年といふ此殺伐な世中に我新派句は茲に毅然たる位置を作るやうになりましたので。堂々と文壇に旗幟を翻すやうになつたのも此時代と心得ます。

とあるのも重要な証言といえよう。

柳原極堂の子規への思い

二 神 將

一、子規との出会いと二人の交友

「懐かしくて、恋しくてたまらん、何とかして友達になりたい」これが、極堂が、子規に対して初めて抱いた気持ちでした。

明治一四年九月、極堂はこの二月に勝山学校を卒業し、県庁の給仕になりましたが、そこを半年で辞めて松山中学に入学しました。

この時、同い年の子規は三級上級生に在学していました。これは当時の学制が義務教育でなく就学年齢が統一されていなかった上に、半年で一級進級したためでした。

この頃、政府は勿論のこと各県も競って近代教育に力を入れていましたがまだまだ旧藩時代の伝統が色濃く残っており、学内では漢学が尊重され、漢詩が出来る学生は友達からも尊敬されていました。子規は特に漢詩が得意でした。

極堂が中学に入った頃、子規はいつも友達達の輪の中心にいて際立った存在でした。極堂はそれが羨ましくて、子規と友達になりたいと思うようになり、子規の気を引くため漢詩を作って交際を申し込もうと決心しました。

早速、極堂は、漢詩の入門書『詩語碎金（しごさいきん）』を借

りてきて五言絶句の漢詩を作り、子規に送ったのです。ところが子規からは「君の漢詩によると婚約したと言ってきたいるが、いずれ機会を見て媒酌の労をとろう」という返事がきました。作り方を間違えたのか極堂の漢詩は意味をなしていなかったようで当時の極堂は漢詩が下手だったのです。しかし、何はともあれ、それ以来二人は親友になりました。

子規は才気あふれる青年でした。そういう青年は何をやっても人並み以上に出来ますが反面目標がころころ変わることがよくあります。子規もそんな人であったのでしょうか。松中時代には、極堂と共に政談演説に熱中し、「自由何クニカアル」「天將ニ黒塊ヲ現ハサントス」などの演題で自由民権論を熱弁しました。明治一五年一月に行った「諸君、將ニ忘年会ヲ開カントス」の演説では、会場に集まった松中生らに対し、英雄は松山に留まるべきでない、早く此の地を去って東京に向かうべしと強烈なアジ演説を行っています。

しかし、子規のその後の行動を見てみると政治家になろうとした形跡は見当りません。これは肺結核、脊椎カリエスという宿病に取りつかれて止むなく方向転換しただけではないように思います。子

規は案外、現実的な考えの持ち主だったのではないであろうか。そう言えば、子規の親類筋には銀行員や官吏など実務者が沢山います。子規が明治一六年に上京して大学に入學する七年間の記録を見て、政治活動に関わった記録が無いことからもう言えると思います。松山ではあれほど政談演説などに熱中していた子規が、東京ではおとなしい、まるで借りてきた猫のようになったのはどうしてか、もっと究明したいと思っています。

子規は、明治三年九月（東大）文科大学哲学科に進學して哲學者を目指しますがノイローゼになつて一年で国文科に転科し、小説家になろうとします。子規はが力を注いだ小説『月の都』が幸田露伴に評価されず、小説家も諦めることになりました。

それに比べ、極堂は中学時代に目覚めた政治活動に一直線です。何事にも樂觀的でよくよしない極堂と子規は性格が全く違つていたように思います。緻密な子規の性格は、あの面倒な古俳句の分類作業や細かい写生画を見れば明らかでしょう。二人の生き方は根本で違つていました。

しかし、極堂はずーっと子規に兄事し続けるのです。自分に無い能力と才能に尊敬の念を持つていたのです。明治二二年春、極堂が海南新聞に入社し、二人が離れ離れになつても極堂はこの気持ちを持ち続けました。仲の良い同級生とはこういうものでしょうか。羨ましい限りです。

二 子規の俳弟子となる

子規は明治五年一二月、新聞日本に入社、文芸欄を担当し、田派宗匠輩による俳句を墮落した「月並俳句」と酷評する一方で写生を取り入れた新しい俳句を提唱して注目を集めるようになりました。

一方、極堂は郷里松山にユーターンしてから海南新聞の記者として忙しい毎日を送っていました。この二人が再び昔のような親密な関係に戻るのには子規の日清戦争従軍でした。戦争は講和によつてあつてなく停戦になり、子規は空しく日本に引き揚げることになりましたが、この帰り船の中で大嗜血をしたのです。九死に一生を得た子規が須磨保養所での療養生活を終えて、静養を兼ねて松山に帰つて来ました。子規は、三日目には親友夏目漱石の下宿「愚陀仏庵」に転がり込んで、五〇日間に及ぶ居候生活に入りますが、ここへ極堂は、訪ねて行き松風会の指導を頼み込んだのです。そして自らも子規の俳弟子になりました。それ以来、極堂は松風会の会員と共に「子規の俳句教室」に日参したのです。子規の教え方は懇切丁寧でした。あまり熱心に教えるものだから先生役の子規が鼻血を出して大騒ぎしたこともありました。また、極堂らが吟行もやったことが無いというので子規の誘いで吟行に出かけたこともありました。こうして極堂は、俳人として育つていったのです。

三 俳句革新の応援団 「ほと、ぎす」創刊

子規の五二日間の松山滞在中は、松風会を中心に松山の俳句熱は盛り上がりましたが、子規が東京に引き上げると潮が引くように冷めて行きました。よく言えば、俳句疲れでしょうか。しかし、極堂は子規的的確で熱心な指導により松風会の代表的俳人に成長しました。

ここに極堂が明治二九年八月二七日付けで子規に送ったボヤキの手紙があります。この中で極堂は「・松風会員大方は脱会して三、四 比較的熱心家とどまるのみ。・風流の事は人の多少によりて何の関係なければ、ぼつぼつとやつて行くつもりなり。・気合衰へてスコシモ斬新の句案など出来ぬものなり」と子規が松山を去つてからの松山の状況を伝えていきます。

極堂は、明治二八年一〇月から子規に頼み込んで海南新聞の俳句選者になって貰っていましたが「もつと強烈に子規の俳句革新運動をバックアップしたい」「子規の関心をもつと松山に向けさせたい」との思いに駆られて、専門俳誌の発行を思い立ちました。この極堂の突飛な企ては、東京の子規らのグループを驚かせました。

明治三〇年一月に創刊した「ほと、ぎす」第一号の「ほと、ぎす発刊の辞」において次のように述べています。「ほと、ぎすの発刊は・新調流布伝播の便を得んとするにあり。斯道の進歩發達を固らんとするにあり。従来、地方新聞の文苑欄をかりて此目的を成さんと計りしが今や専門雑誌にあらざれば以て之を全ふする能はざ

るを見る。即ちここに此挙あり……。雑誌ほと、ぎすは、実は先学後学の間を斡旋して斯道の進歩發達と新調の流布伝播せんことを期す以て發刊の辞となす。」と堂々とした主張です。そこには新聞社の編集責任者としての自信も窺えます。この極堂の大パフォーマンスは大成功を納めました。

中央で悪戦苦闘していた子規一派には力強い応援団が現れたことになりました。ここに極堂が他の俳人とは違った存在価値が認められるのです。地方に居るといへども極堂を無視出来なくなつたのです。そして近代俳句史に大きな足跡を残すことになりました。

極堂の發起したこの「ほと、ぎす」発行は、子規派の最初の機関誌となり、ここに結集した一門によつて日本の俳界を一色に染めてゆくのです。この俳誌「ほと、ぎす」は、高浜虚子の手に渡り、明治三一年一〇月から装いも新に東京で発行されることになりました。そして今日の世界的な専門雑誌に成長して行つたことはご案内の通りです。

四 嗚呼 子規遠逝ス

子規は、母親八重と妹律の手厚い看護により、病床にありながら俳句革新のほか、短歌改革にも手を伸ばし、更に新体詩までと広く短詩系文学のリフレッシュ化に取り組み大きな足跡を遺しました。子規は、明治三十三年六月三日に岡麓氏宅で開かれた園遊歌会に横になつたまま人力車に乗って出かけたのを最後に外出しなくなり、更に一月には寝返りも困難になるなど、ほとんど寝たきりの状態になり

ました。そして更に、明治三四年九月頃からは置一枚のわずかな場所から「仰臥漫録」三五年五月五日からは「病牀六尺」など病人とは思えない研ぎ澄まされた素晴らしい随筆を書き続けたのです。

極堂は、「ほと、ぎす」を高浜虚子に譲つてからは政治活動に専念するため俳界から引退していました。そのため晩年の子規とは直接の交流はほとんどありませんでした。

ところが、明治三四年初めに、極堂はちよつとした思い付きから子規を慰めようと思つて松山の名勝負写真数枚を送りました。極堂にはそういうところがありました。写真は、城山、道後温泉、石手川堤などでした。子規は久しぶりに見る郷里の風景を懐かしみました。そしてその写真のお礼として「写真有難ウ故郷ノ光景ツクヅク見テ居ルト、コマカナ処二面白ミガ何ボデモアル、代リニ木像上人ノ写真一枚アゲル」の手紙とともに前年蕪村忌に写した瘦せ衰えた子規の写真を送つてきました。

極堂も最初の写真を見た時は誰のものか分からなかつたようです。それほど見る影もない瘦せ細つた骨と皮の「木像上人」のような肖像写真でした。妻のトラが「これは正岡さんではないですか」と言つたのでやつと分かつたのです。極堂は、子規の病がいよいよ重くいつ死んでもおかしくない状態であることを実感することとなりました。

そうして極堂の子規への熱い思いが沸き上がったのでしよう。子規が亡くなる年の明治三五年八月七日の海南新聞には〇〇生の名で「松山の人物」の子規礼賛の記事が掲載されました。この〇〇生は

極堂のペンネームです。

「……僕が最も子規子に推服する点、子を推して偉人である、大人物である云ふ点は、何処にあるかと云ふに、其のエネルギの強い、其の精根の強いと云ふ点であつて、誠に日本人には珍しいほど精力のつづく人で、子の精力は殆ど無尺蔵であるまいかと思はれる位だ。……子の病は不治の肺病で発病以來彼之れ十年に垂んとしてあるのに終始病床に横て今日まで依然壽命を維て居られるだけでも早や不思議な位だ。それに子は病辱の裡に在て、刻々筆を絶たずと云ふ風で以て文章を綴り、俳句を作り、著述をやり、運座をやり、書を読み、門下生に教へ、そうして其隙で來客に接シラマケに大々的氣焔を吐くと云ふに至りては実に驚かざるを得ないではないか。……「吾に病なかりせば」「吾に天命を假せば」とは、子が胸中の憤悶であろう。けれども、子の病氣は子自身にとりては、さぞかし千秋萬古の大遺憾だらうが、我文壇の爲には、かえつて仕合せであるかもしれない。……畏天無常、吾松山唯一の名物としてほるべき此の大詩人、大人物に不治の難症を送り其の天寿を奪はんとするなどは、誠に不埒千万な仕打ちだ。ああ、天は、何故に子に病を与へて其の志を妨げたのであるか。」

この文章にある極堂の子規への思い、全て言い尽くされているように思いますが、極堂はまだ言い足りなかつたのでしようか、九月一四日からペンネームを〇〇生から△△生に変えて「正岡子規君」の掲載を始めました。この連載は、一〇月二日まで二五回にわたつて続けられました。今までの子規を讀るだけでなく子規の思い

出が中心となった記事に変わってきています。

この連載中、運命の九月十九日がやつて来たのです。子規の亡くなった翌日の海南新聞は、一面トップで子規の訃報を伝えています。この記事の扱いは当時としては異例中の異例です。肖像画も無理に一面にはめ込んだことが分かります。極堂は、明治三二年取締役編集長となつて海南新聞を仕切っていましたから当然、これらは極堂の指示があつたものと思ひます。

この日の「正岡子規君」(6)は、子規と石手寺方面への吟行の様子が述べられ、余土村の村上齋月氏を訪問された様子に及んできません。

「君は或時人力車により余土村に村上齋月氏を訪問されたが其婦途車上の吟に『秋風やわれに神なし佛なし』と云ふ句をものされた、アア之を読んで誰か同情の涙にむせばぬものがあらうや、自分は此処まで書き来りし時、子規君が遂に逝去した東電に接したので筆を投じて大息長大息受天何ぞ無情なるを絶叫せざるを得なかつた」と述べていますが、その心情はいかばかりであつたでしょうか。

五 子規顕彰の数々

(1) 子規顕彰の決意

極堂は、子規没後五十年祭を記念して「子規の話」を出版しました。そして極堂はこの「自序」で次のように述べています。

「いつの頃からか、私は子規とともに生きようというようなことを考えてきた。子規の偉大さは今更いいうまでもないことだが、あれ

ほどの偉人を出した郷土では、それほど子規のことを大切に思っていない。また充分にその偉さが知られていないと思ひそれが残念で仕方なかつた。そこで私はもう老骨で役にも立たないけれども、死ぬまで子規のためにこの身を捧げたいと決心してきたのであつた。

(以下略)

極堂は、昭和二六年九月十九日松山市庁ホールで行われたこの五十年祭の記念式典に来賓として挨拶に立ちました。そして、子規の遺影に向かつて語りかけるような口調で次のように述べました。

「明治三二年六月、まだ暑さに間がある頃じゃつた。上京して子規を見舞つた。昼食のご馳走になつていとお母さんが給仕をしてくれながら『升の病気が進むのがつらうて見ておられぬ。私の命をちぢめて升の命を少しでものばしたいと思つて、毎晩神仏に祈つております』としみじみ話された。あの気丈な母堂がこのようにいわれるのを聞いて私は返事に困つてしもうて、『おばさん、心配しなさんな、升さんは死にませんよ、五十年も百年も生きますよ』と答えると、傍らに寝ていた子規が『オイ馬鹿いうな』といった。私は、『馬鹿なことではない、一生懸命いうとるのじゃ』と答えた。きょうの式典に出て、あの時の私の言葉があつたことを喜びとも誇りとも思つておる。」

いかにも幼い頃からの友人として心の籠もつた言葉ではないでしようか。

(2) 子規堂の建設

極堂が、子規を顕彰するためにまず第一にやったのは、新聞に子規を讀えた記事を載せたことでした。次にやったことは、子規旧居の復元でした。大正一三年五月、中の川にあつた子規旧居が取り壊されたのを知り、村上齋月、岩崎一高らと図つて一千円を集め、子規旧居の一部廃材を使つて書齋、書院を正宗寺の境内に復元しました。この完成は、大正一五年三月一〇日でした。この初代子規堂には、子規の位牌が祭られ、また遺族からは子規の遺品も贈られ陳列されるなどにより全国の俳句関係者が多数訪れる処となりました。しかし、昭和八年二月六日、この子規堂は、正宗寺失火による類焼で焼失してしまいました。

この頃、極堂は東京に出ていて、俳誌「鶏頭」の主宰者として活動していましたが、この子規堂焼失のニュースを知るといち早く行動を起し鶏頭四月号に鶏頭同人名で「子規漱石の遺跡保存に就ての提唱」更に七月号では「子規漱石の遺跡保存の具体化に就いて」と題して遺跡保存を広く全国に呼び掛けました。

ここで極堂らが提唱した保存運動は、単なる子規堂の再建だけでなく子規漱石の遺跡―愚陀仏庵を買収保存し、両文豪の文献を集めて俳句の殿堂にしようとする壮大な計画でした。

結局、この計画は、愚陀仏庵の買収に失敗し、子規堂の再建だけに終わったのは惜しまれます。二代目子規堂は、募金の集まりが悪く、工期は大幅に遅れ、昭和一〇年九月一四日に完成しました。因みに二代目子規堂の設計者は、県庁本館の建設でも有名な木子七郎

でした。

昭和二〇年七月二六日、松山市は米軍による空襲により焼け野原になりましたが、正宗寺も子規堂も灰塵に帰りました。

松山市街の大半が焼失するという大混乱の中で子規堂の三度目の再建は、思わぬ内に進められ昭和二十一年一月二四日に完了したのです。それは当時松山市会議長であつた大西弘氏の独断と個人的負担で再建されたもので、再建に当たっては、極堂の記憶を頼りに、中の川の子規旧居を当時の姿のままに再現したのです。文化行政がまだ確立していない当時であつて、よく文化財保存の立場をわきまえた処置だと感心するばかりです。

(3) 子規会の創設

極堂は、戦時色の強まつた昭和一七年一〇月二三日、一五年にわたる東京生活を打ち切つて帰郷しました。年齢は既に、七五歳になっていました。松山に帰つて来てまず驚いたことは松山の人達が子規のことを忘れてしまつてゐることでした。そこで極堂は、伊豫日々新聞時代に特に親しかつた曾我正堂、田中蛙堂らに子規顕彰を働き掛けたのです。兩名ともに異論もなく、周りの知人や友人にもこの話をするようになり、松山の文化人や知識人の間でもこの話題が広まるようになりました。

この頃、松山には県立図書館に松山読書会がありますが、暮れも押し詰まつた年末に、この読書会の会長で図書館の館長でもあつた菅菊太郎氏から話があつて、読書会に来て子規の話をしてほしいと

依頼が来たのです。そこで極堂は、子規の俳句革新の話や文学界での評価など子規の偉業を述べ、出身地である松山で、子規顕彰、子規文学の研究を行うべきだと語ったのです。

そして読書会では、満場一致で極堂の提案が受け入れられました。これに力を得た極堂は、子規顕彰の組織化に向かって全力投球することになりました。その努力が実って、昭和一八年一月一九日この正宗寺で松山子規会の発会式が行われました。集まった者は、当時松山の文化活動の中心的役割を担っていた景浦稚桃、岩崎一高氏ら二〇名でした。ここに松山子規会は誕生したのであります。

この会則の第二条には、「本会は俳聖正岡子規ヲ敬仰、其ノ遺業ヲ不朽ナラシメ、且郷土ニ於ケル子規系巨星の事跡ヲ研究スルコトヲ以テ目的トス」と定めてあり、この会が子規顕彰の会であることを明言しています。またこの会は、昭和二〇年八月松山が戦災に会った時に一度開かれなかった（極堂は一人で開いたと言っている）のを除き、今日の六六四回まで営々と続いているのです。

(4) 子規句碑の建立

子規は亡くなるまでに二万五千句の俳句と二千五百首の和歌を作ったと言われています。三五年間でこれだけの句を作ったのは驚きです。

前述したとおり極堂は、昭和一七年に帰郷し、子規顕彰に精力的に取り組みましたが、その中でも句碑建立には熱心でした。極堂を知る人の多くが、極堂の句碑を立てたいと相談に行っても、「儂の

はどうでもよい、子規の句碑を立ててくれ」と言われたと証言しています。

松山市教育委員会の調べによると現在、松山市内には約三四〇基の句碑があるとされていますが、そのうち約一五〇前後が子規の句碑だということです。ちなみに、極堂の句碑は、県下でも三一基、松山市内にはわずかに一二基です。

子規の句碑のうち極堂が揮毫したものを次に掲げます。

昭和二〇年秋 浄瑠璃寺 永き日や衛門三郎浄瑠璃寺

昭和二六年七月 法龍寺 粟の穂のこ、を叩くなこの墓を

昭和二七年四月 窪野公民館跡 旅人のうた登り行く若葉かな

昭和三一年五月 椿神社 賽銭のひゞきに落る椿かな

昭和三八年八月 石手寺 身の上や御鬮を引けば秋の風

また新居浜には歌碑があります

昭和二六年九月 大山積神社前

武蔵野に秋風吹けば故郷の新居の郡の芋をしぞ思ふ

また、他にも沢山あると思いますので知っている方は教えてください。極堂の晩年は、これらの通り子規顕彰そのものでした。子規堂の堂守りとなつて、全国から訪れる子規ファンや俳句研究者の相手、毎月開かれる子規会の世話などで充実した日々を送っていたのです。

しかし、ここも安住の地にはならなかったのです。新しい住まい探しに四苦八苦、やっと近くの法龍寺のご厚意で約三〇坪ほどの土地が入手できたのです。そしてここに子規庵を建立しましたが、こ

の建築費等捻出に苦勞した話は今回のテーマと直接関係がないので省かさせて頂いています。

いずれにしても極堂の終焉の地となった子規庵は、正岡家の菩提寺だった法龍寺の一角にあり、そこに正岡家の墓もあつたのです。また、ここは子規が通っていた末広学校の跡でもあり子規ゆかりの土地でもあつたのです。運命のいたずらでしょうか。極堂と子規は運命の赤い糸にしっかりと結ばれているとしか思えません。

極堂の辞世句 「吾が生は糸瓜の蔓の行く処」

でも明らかのように、極堂の晩年は正に子規顕彰の日々でもありません。

極堂が亡くなって四〇年、子規は子規博という立派な記念博物館が出来て毎日、全国から多くの俳句ファンや観光客が訪れ、尊敬慕われていますが、この子規博建設のきっかけを作つた極堂はどうでしょうか。極堂は、子規顕彰さえ出来れば良いと言つてでしょう。しかし、それで良いのでしょうか。

現在、極堂は子規博の一角に他の子規門人の一人として展示されているに過ぎません。極堂が、昭和一七年に松山に帰郷した時に子規が風化していたように、今、極堂が松山の、いや愛媛の俳界に遺した功績も忘れ去られようとしています。もう少し、極堂の顕彰にも力を入れてもいいのではないのでしょうか。これが今の私の率直な気持ちです。

ご清聴ありがとうございます。

(会員 平成一〇年五月例会講演)

会員計報

長年、本会のためにご尽力賜りました次の方々が、ご他界されました。謹んでご冥福をお祈りします。

森 みね子さん 八月一〇日逝去 八七歳 「アララギ」同人。

喪主 森 若松さん(夫) 温泉郡重信町樋口四八一—

三井 清(彌百)さん 八月二日逝去 八七歳 極堂と親交。

喪主 橘 英司さん(女婿) 松山市溝辺町四—三

別宮満寿雄さん 八月二〇日逝去 九〇歳 極堂研究者。

喪主 別宮信子さん(妻) 松山市小栗町二丁目四—二二

【新刊紹介】

「人間 正岡子規」 著者 和田 茂樹

講談社版「子規全集」が絶版になって以来、子規の文学に触れる機が一般に難しくなつたのに鑑み、子規の生涯と句歌との構成とし、俳句・短歌には、創作年を明確にし、生涯との関係を配慮しつつ、注釈と短評が加えられている。詳しい「子規年譜」も付けられている。

(発行所 関奉仕財団 二一九ページ 定価千二百円)

「子規の素顔」 著者 和田 茂樹 えひめブックス

吉野義子氏主宰の俳誌「星」掲載稿のうちから、六一編を選び、加筆・編集したもの。子規の日常生活や素顔がよく分かるように、子規の残した日常の細かな資料を多く取り上げて、最も人間味豊かな子規の側面に着目し、まとめたものである。

(発行所 愛媛県文化振興財団 三九七ページ 定価千円)

子規の習作期の短歌(一)

泉 寔

明治一五〜一八年

正岡子規が初めて短歌を作ったのは、明治一五年、一六歳のときであった。

隅田川堤の桜さくころよ花のにしきをきて帰るらん

この歌が子規の歌集「竹の里歌」の冒頭の歌である。これは子規の初期習作時代を象徴するものとみてよい。古今集、新古今集などの中古和歌の詠みぶりそのものである。ただし、この年の歌はこの一首だけであるので、多くを云々することができない。この一首に限って言えば、これは友人の上京を祝う歌で、やがて友人が成功を収めて帰郷するであろうという儀礼的なものである。習作時代には実にしばしば「らん」が使用されるが、そのことは、古今集、新古今集の発想に立っていたことを示している。

翌一六年には作例はなく、一七年になると、抹消歌も含めると五首の歌が「竹の里歌」に認められる。

むら鳥のなく声ばかり聞こゆなり若葉をくらき山の夕暮 子規

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮 藤原定家

(新古今、卷四、秋)

子規は「むら鳥の」を詠んだとき、おそらく定家の「三夕の歌」

を思い浮かべていたであろう。この歌は、三句切れ、体言止めの形式で、新古今集の詠みぶりそのものであり、内容も、新古今集の幽玄の世界を目指しているようだ。

しはしとて松の根泉くみながらすすしき夢をむすひつるかな 子規
道の辺に清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ

西行法師(新古今、卷二、夏)

子規は西行の歌の「柳蔭」を「松の根」に、「清水」を「泉」に、西行の「しばし・立ちどまりつれ」を「しはし・夢をむすひ・」に変えている。かなり手の込んだやり方の本歌取りといってもよいところにまで達している。子規は西行よりも意欲的であるとも見える。

子規の短歌の作りはじめの様子は以上のようなものである。

子規が短歌を始めたのは明治一八年からである。子規自身その間の事情について『筆まかせ』(明治二二年)に次のようにのべている。

「余が和歌を始めしは明治一八年井手真禪先生の許を尋ねし時より始まり・」

客観的に見ても、この一八年を正式の短歌作成のスタート点とみなしてもよからう。俳句を明治二〇年に大原其戎に習い始めたのより二年も前のことである。

ところで、『筆まかせ』に挙げられた「井手真棹」なる人物は、
いったいどんな人であったのか。この人物については、武智雅一先
生の詳しい調査があるので引用させていただきます。

「右文中の井手真棹先生とは井手淳二郎先生の祖父にあたられ、
いわゆる旧派の歌人である。井手先生のお話によると真棹（名は正
雄、天保八年八月八日生、明治四二年八月一日没、年七三）は、
西村清臣（明治一二年没）の長男に生まれ、後、井手正寛の養子と
なった。父の清臣は景樹派の歌人出、海野遊翁と交渉があり、当時
松山歌壇の総師として門人も多かった。真棹は僧・性海の弟子。そ
の歌を性海に見せることを父清臣は快しとしかつたということであ
る。しかし清臣の没後松山の歌壇は真棹をおしたので蓬園吟社一
蓬園は真棹の屋号一を創めた。真棹は明治二〇年頃海南新聞掲載短
歌の選者ともなり、終生後進の和歌指導に尽力した」

以上のことから分かるように、子規が最初に師事した井手真棹は
桂園派の師匠であった。このことが子規の習作期の制作にとつき
わめて重要である。そのことについては後に触れることにして、こ
の一八年の作例を見て行こう。

月前水鶏

月はさそ我睡をはさますらんまきの戸たたく夜半の水鶏は 子規
真木の戸もささでやすらふ月影を何をあかずとたたく水鶏ぞ

（紫式部集）

子規は明らかに式部の歌を踏まえている。子規の歌のほうが入り込
み入っているかに見える。またこの歌には、徒然草の「早苗とるころ
くひなのたたくなど、心ほそからぬかは」などの中古の美的理念が
自然と取り入れられているものと言つてよからう。

水莖のつたなき跡も後の日にけふの宿りのかたみとや見ん 子規
水莖の中に残れる滝の声いとしも寒き秋の風かな 能宣朝臣

（新古今、卷十八、雑）

子規は新古今集の歌を頭に置いて詠んだに違いない。

夏をたにしらぬ小河の水上の山の奥にや秋はたつらん 子規

川風の涼しくもあるか打ちよする波とともにや秋は立つらん

つらゆき（古今、卷四、秋）

子規の「夏をたに」は、貫之の歌を本歌とすると見てよからう。

貫之の歌は谷川のあたりは、秋の気配の早いことを詠んでいる。子
規の歌も、水上は秋の早いことを詠む。同じ世界の表現である。

こう見て来ると、子規の当時の歌はことごとくと言つていいほど
新古今集、古今集の模倣に明け暮れている。さらにそういう例を挙
げよう。

武蔵野の萩わけゆけばわか袖に結ふとしらで結ふ露哉 子規

さをしかの朝立つ野べの秋萩に玉とみるまでおけるしら露 家持

（新古今、卷四、秋）

明けくれにこひぬ日もなし玉の緒のたえねはたえぬ思ひなるらん 子規

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

式子内親王（新古今、卷十一、恋）

以上見て来たとおり、子規が本格的に和歌を始めた年の作例はそ
の師の感化もあって、古今集、新古今集の世界に近いものであった。
子規の器用さによつてそれらの王朝和歌集の中においても、おかし
くないような詠みぶりがかがえる。子規の目指したところは、中
古の美的世界そのものだった。

ところで、子規が一八年当時、師真棹から受けた添削の草稿が、残されている。それを見ておこう。

(愛媛国文研究二二号、子規に関する雑誌一井手淳二郎氏)

庭の面に風吹きそめ姫松のあはひに出づる月のさやけさ　子規
嵐吹く尾上の松の木の間より出で来る月の影のさやけさ　(添削)
子規自身の歌が既に古今、新古今の世界を目指したものを、さらに伝統的な桂園派の世界にはめこもうとする作業である。子規の歌には「姫松」という実体があるが、添削されたものには、それさえ失われ、まったく一般的、類型的なものに均ざされている。

さらに次の添削例を見ると、真棹の理想としたものが明白である。つまり実体的なものからいかに遠ざかり、一般的、類型的なものに近づけるかが理想であったことがあきらかである。子規の元の歌の方がまだ生き生きとしている。

のぼりくる朝日に向ふ草の葉の露よりもろき命なりけり　子規
吹く風に向ふ千草の露よりもろきは人の命なりけり　(添削)

明治一九年

むさし野に消えにし露の名残りにや我のみ今も袖しほるらん
海神も恐るる君か船路には灘の波風しづかなるらん
やはり前年と大差ない詠みぶりである。「や・らん」「か・らん」の文型であり、原因推量を中心に据えて、機転の効いたところを示そうとしている。因みに新古今には、次の「や・らん」のパターンの作例が見られる。

桜花すぎ行く春の友とてや風の音せぬよにもちるらん

大納言忠教(新古今、卷十六、雑)
都なるあれたる宿にむなしくや月に尋ぬる人かへるらん

大江嘉言(新古今、卷十六、雑)
現実との関わりをもつとは言え、そこから観念の世界へ、空想の世界へ跳躍するところが見られる。子規についても同じ詠みぶりが見られる。現実の景色に留まることができなくて、つい観念の世界に行ってしまうという癖がついているようだ。

岩ふみて落ちくる瀧を仰ぎ見れば空にしられぬ霧そふりける
いく坂をのぼりのぼりて尋ねきし山の上にもうみを見る故
一九年の作例では比較的、現実的な歌で、景色から目を離すまいとする歌である。しかしそれらも名所歌であつたりして、古い詠みぶりからは脱していない。細かいところに機転を利かそうということに力を入れている。

明治二〇年

白梅にかかるけふりは我宿の庭に春立つ霞なるらん
子規のこの歌は、古今集の「見立て」に当たる歌である。「白梅にかかるけふり」を「春立つ霞」に見立てている。「らん」の使用は上の句の現実を観念の世界に流している。

花見めやけふを盛りのおすか山は、次の「あすたのむまし」に係る序詞である。巧みな序詞の用い方であり、王朝和歌になじんでいることをうかがわせる。内容は古今集の「雑」に見られる厭世的な歌に倣っている。

見渡せばはるか沖のもろ舟の帆にふく風ぞ涼しかりける
「見渡せば」という詠み出しは大胆であるが、新古今の「見渡せば

山もとかすむ水無瀬川」などに前例がある。しかしこの一首は現実世界に踏みとどまって一首をまとめているところに新しさが感じられる。この年の歌は、わずか九首しか見えず、そのうち八首までが抹消歌である。この「見渡せば」だけが残された歌である。抹消がどんな観点からなされたかは詳らかではないが、子規自身この歌の、現実から目を離さない詠みぶりを評価したと思われる。

明治二十一年

明治二十一年の「竹の里歌」所収の作品はわずか一〇首しか過ぎず、しかもその内の九首までが抹消歌である。前年のところでも触れたが、後の子規にとっていかに不満足な作品であったかを物語っている。我がこひはあはでの浦のいそによる

みるめばかりやあふこともなし 子規
わが恋は荒磯の海の風をいたみしきりに寄する波も間もなし

伊勢(新古今、巻十一、恋)

子規の「我がこひはあはでの浦のいそによる」は「みるめ(海松布)を導く序詞の働きを持ち、まさに王朝の歌である。「恋」「あふ」「みるめ(見る目)」の縁語の使用、「みるめ」に「見る目」と「海松布」を掛けた懸詞の使用など、あらゆる王朝和歌の修辭を駆使している。本歌としては新古今集の「わが恋は荒磯の海の」が挙げられる。子規の方がはるかに技巧をこらしている。

わが恋は岩にせかるるたき川にあふかと思れば又別れつつ 子規
瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はんとぞ思ふ

崇徳院 (詞花集)

子規は、崇徳院の「岩にせかるる滝川の」をそっくり借用してい

る。そのために抹消した作である。これは盗作と見られても仕方ない作である。子規はいかに先行和歌に熱心に学ぼうとする態度であったかが分かる。

「竹の里歌」所収の歌は以上であるが、この年の著作「七草集」中の「女郎花の巻」に約六〇首の短歌が見られる。それを見ておこう。近年この「七草集」と明治三〇年以降の短歌との関連が云々されるなど、初期作品の中でかなり注目されはじめている。宮川康雄氏(信州大)の研究、講談社版子規全集の成果などを踏まえて見て行く必要がある。

まず初出の形で見て行こう。

樹の間より川ゆく真帆の影見えて風のたえせぬすまひなりけり
これは、後に改作されたために、写生歌の出発点のように言われるが、この形では下の句の「風のたえせぬすまひなりけり」の結びは、中古の歌の纏め方である。とは言え、従来に歌に比べると、現実世界に踏みとどまって詠まれている。これが、次のように改作された。

櫓のはにうまつらねたる櫓の木の下枝をあらみ白帆行く見ゆ(改作)
二十一年の「樹の間より」と「櫓のはに」との最大の違いは結びの所だ。「すまひなりけり」は先に述べたように、難なく纏めようとする感がある。それに比べ「白帆行く見ゆ」には作者のじつとものを眺める目が浮かび出てくる。その違いは大きい。この形に改作されたのがいつかということ、子規の短歌史の中できわめて重要である。

結論から先に言えば、私としては宮川氏の見方に従いたい。つまり、「七草集」の他の歌などと同じ生硬さ、また「見ゆ」が出てく

る時期などから、二八年以降と見るのが妥当ではないだろうか。「見ゆ」で結ぶパターンが出て来るのは二八年からである。宮川氏は三二年ではないかとされるが、それを否定する決め手はない。

「檐のはに」の一首について詳しく触れたが、「七草集」の他の歌を見ておこう。

さみたれにすみたの川水まさるらん見なれぬきしに舟つなくなり
さみたれにひるくらければあくるともしらてや酉のねやになくらん
これらの歌にみられるように子規の関心は現象そのものより、その原因の推量の方に傾いているのである。やはり二年のペースは、先の「檐のはに」にあるのではなく、これらの歌にあるといえよう。「や・らん」のパターンがいかに強く子規の頭に焼き付いていたかを示すのである。

「七草集」では子規は、隅田川を好んで詠んでいる。在原業平の影響、伊勢物語の影響の強いことが見逃せない。子規は業平ぶって、得意然としている。

なにしおふすみ田の川の川波のにこれるまでにふれる五月雨
雨はれてすみたの川は濁るとも月のかけのみ底にすみけり
あちきなき世をさけし身も都鳥都のたよりきかまほしけれ
これらの歌からかもし出されている雰囲気は、都落ちした業平が隅田川を目の前にした感情と等しいものがある。したがって子規の目指した内容は業平の世界であり、題詠的であり、言葉の巧みなタビスリー（綴れ織）である。古今集の世界そのものである。

本歌取りの歌いぶりも相変わらず続いている。

日はくれてまた夜ならぬ夕すすみかたへすすしき風を吹ける

子規

夏と秋と行き交ふ空の通り路はかたへ涼しき風や吹くらん

凡河内躬恒（古今、卷三、夏）
子規の「日はくれて」は、古今集の「夏と秋の」が本歌になって
いる。躬恒は、夏と秋の通路を考えたのに対し、子規は日中と夜と
の間を設定した。子規は「風を吹ける」とし、躬恒は「風や吹
くらむ」としている。子規の本歌取りは巧みであり、機転がきいて
いる。こういう模倣的な習練が持続的におこなわれている。

子規の本歌取りと思われる作例を挙げておこう。

秩父てふ峯より出つる墨田川かきりしられぬ恋もする哉

子規

郭公鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな

読人しらず（古今、卷十一、恋）

向しま花咲くころに来る人のひまなく物を思ひける哉

子規

秋の野に乱れて咲ける花の色のちくさに物を思ふころかな

つらゆき（古今、卷十二、恋）

「女郎花の巻」の中の桂園派的な歌を挙げてみたが、後の写生歌
の萌芽と見られる作例もいくつか拾い出すことができる。

歌のみは遠く聞こえて柴舟の近づくまに見ゆる川霧（初案）

あけほのに渡りの舟の行へたに見わかぬまでに霧はこめけり

「歌のみは」は、新古今集に近いが、「見ゆる川霧」の「見ゆる」

は、「見ゆ」に繋がって行くことを感じさせる。「あけほのに」は、
いささか説明的だが、実景から目をそらしていない。

明治二二年

この年の短歌はわずか一首であり、前年に比べるとはなはだ低

調である。

いつまでもつきせぬ御世にくらへては千代のみとりの松もものは

子規

常盤なる吉備の中山おしなべて千年をまつの深き色かな

読人しらず（新古今、巻七、賀）

子規の歌は例に挙げたような賀歌に做った作である。「つきせぬ御世」「千代」「みどり」「松」などの縁語で結んだ歌で、類型的である。

おきあまる涙の露としらねばや袂の上に月ぞやどれる

子規

秋の露やたもとにいたく結ぶらん長き夜あかずやどる月哉

太上天皇（新古今、巻四、秋）

子規は「涙」「露」「袂」「月」などを並べて、そこに一つの世界を作ろうとしているが、新古今集の世界である。月並みそのものと言えよう。子規の歌には、「月を見て感あり」の詞書きがあるが、現実の月を見てはいない。新古今集の月を頭に浮かべているのである。写生まではまだ遠い。

白粉と見えたる雪のふじ額空はみどりのびんづらにして

おこつてはふくれるふぐの腹の皮よりて聞き人は笑ふなるらん

いずれも狂歌まがいの作である。子規自身短歌に行き詰まった思いを抱くようになっていたであろう。それがこのような歌を詠ませたと考えられる。

しかしこういう遊びが、これまでの子規の古今集、新古今集への盲目的な傾倒に風穴を開けるきっかけになる。つまり子規が歌に対して自由になって行くことである。これ以後もこの種の歌が現れるのは、かえつて重要なことかもしれない。

明治二三年

この年は短歌五〇首あまりと長歌数首がよまれている。とこしえに散らぬつづれの錦とはもみぢに似たる鳥の跡かな

子規

住江の浜の真砂を踏むたづは久しき跡をとむるなりけり

伊勢

（新古今、巻七、賀）

これは古今集の修辞法、「見立て」に做った詠みぶりである。業績を「鳥の足跡」に譬えたりする表現は中古の賀歌に見られるやり方である。この歌は「紅葉会の発会を祝す」という賀歌で、「紅葉会」を「紅葉に似たる鳥の跡」として、「とこしえに散らぬつづれの錦」であつて欲しいというのである。左に挙げた新古今集の例歌ともどこかに似たところがある。

月影もやどさじとてや袖の露はらふはつせの山風かな

子規

物思ふ袖より露のならひけん秋風ふけば絶えぬ物とは

寂蓮法師

（新古今、巻五、秋）

子規の歌の「月影」「袖の露」「山風」の組み合わせは、中古の和歌の組み合わせそのものである。「物思ふ」の歌と比べて見るとよい。寂蓮では「袖」「露」「秋風」の組み合わせからなっている。子規は完全に王朝和歌の中に生きていたのである。

ところでこの二三年にも狂歌めいた歌が詠まれている。前年よりはるかに多い歌にのぼる。

松山の小町もあとになり平やきせんのにらん風に大伴

科学者が水を分析して見れば一ツのものが二ツとぞなる

まるで悪ふざけの狂歌であるが、この自由な心の在り方がますます

す必要となるのである。中古の和歌、桂園派の桎梏からの脱出は並みのことではできないのである。

明治二四年

この年子規は各地を旅行し、その印象を詠んでいる。しかし実感をそのまま表現するまでには至っていない。二一年の「女郎花の巻」に見られたように、自分を西行や業平、芭蕉になぞらえて詠む傾向が著しく、彼らの影響が強く感じられる。「かくれみの句集」から観察していこう。

世の中はすみかなければ天が下いつこかおのがやどりならざる 子規
世の中はいずれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる

読入しらず（古今、卷十八、雑）

心しもなきものなから佐保姫のまことうれしき春のよそほひ 子規
心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ 西行

（新古今、卷四、秋）

子規の歌と本歌と思われる歌を併記したが、依然として子規の読みぶりは中古の歌に倣うものであることは一目瞭然としている。このことが、明治二四年でも子規の基本の創作パターンである。

世をすてし身とおもへど雨の日はすげのふるみのすげのふるがさ
この歌に顕著に現れているように、子規の理想は依然として中世的な隠遁者の生き方であった。表現もさることながら、生きる姿勢そのものが中世的な価値に立脚している以上、写生までの道程はそれほど容易なものではない。

この年も三句切れ、体言止めの詠みぶりが圧倒的に多い。子規の

歌体はほぼ新古今集の歌体に固まって来た感がある。俳句になじんでいた子規には、新古今集の方がすんなりと身についたと見てよい。俳諧連歌の発生が新古今集の後であることを考えると当然といえよう。

かざしたる花のうつり香したたりてすげのをがさにそぼつ春雨
形の整った歌ではあるが、類型的、一般的なイメージしか喚起しない。現実的な印象はベールに包まれた感じで、隠遁者風である。

次に「かけはしの記」を見ておこう。

つづらをりいくへの峯を渡りきて雲間に低き山もとの里 子規
岩根踏みかさなる山を分けすてて花も幾重のあとの白雲

藤原雅経（新古今、卷一、春）

子規の歌では、峯みねを越えて来て雲間から見える里の姿を眺めている。雅経の歌はやはり山また山を越え来て、花が白雲のようにかすむ背後を振り返る。上三句は両者ほとんど同じである。下四、五句は、子規では高みからの眺めであり、雅経では麓からの眺めである。大筋では子規の目指す美も雅経の目指す美も同じものである。

信濃なる木曾の旅路を人間はばただ白雲のたつとこたへよ 子規
都人いかがと問はば山高みはれぬ雲居にわぶとこたへよ

小野貞樹（古今、卷十八、雑）

やはり「かけはしの記」においても、中古の作品との関連のたどれる歌がかなりの量を占める。右の作例は併記した歌との類似性が明らかで、古今の世界、伊勢物語の世界という先行文学の中の制作とみなさざるをえない。ただ子規は模倣をしても、それはかなり本格的で、中古の作品の中に入れても、遜色のないものにまで達している。

この二四年においても「らん」の頻用が目立つている。その点から言っても観念的な作歌態度が依然として強いことが指摘できる。

現実から観念の世界へすらりと行つてしまふのである。

次の「久方」の歌も、その例で、桜に視点が定まらない。

久方の鏡にうつるさくら花これや御神の姿なるらん

この年の注目すべき作品としては「山吹の花」連作五首である。

そのいろにそみやしぬらん山吹の下行く水にさらす白ゆふ

水車ひびく野川の夕寒みほろほるとちる款冬の花

やまふきのさきそめしより賤の女のやつれ衣にかはる春風

春駒のあゆみもおそし賤が家の垣根にさげる山ふきの花

あやにくに枝のみたれて玉河の浪をりかへる岸の山吹

この五首は、「山吹」とその周囲をよく捕らえている。すぐ観念の世界へ飛躍していかないところに注目すべきだ。歌体は新古今集的であるが、後の写生歌的な把握がほの見えてきている。また一つの題で何首か詠むというのは三〇年以後の連作につながるころである。この二四年は、子規の俳句活動では一つの大きな節目になった年である。二九年にそれを回顧して次のように述べている。

「この年の冬始めて、七部集、三傑集を詠み、大いに感ずる所あり。漫遊の念盡なり。僅かに三日の糧をつつみて武蔵野を蹈んで帰る。往復得る所十数句に過ぎずといへども、また前日の孱弱なる音調、繊細なる意匠にあらず、実景に得たるもの、空想を加へたるもの、皆多少の新趣味をそなえて斧鑿の痕少きを見る。句法のやや緊密におもむき、懈弛を脱したるもこの時よりの事なり」

(我が俳句 明治二九年)

この二四年は、子規にとつての俳句開眼の年である。右の記念すべき旅は「高尾紀行」という作品に記されている。その中の句を何か挙げておこう。

汽車道の一筋長し冬木立

麦蒔やたばねあげたる桑の枝

馬糞もともにやかかる枯野かな

馬糞のぬくもりにさく冬牡丹

これらの句はいずれも子規の体験そのものを詠み、とくに卑俗なものや材料とすることによつて、いささか意表を衝く作品になった。やがてこの詠み方、その背景にある自由な発想がこれから進むべき方向となる。

この俳句で見いだした活路は、やがて短歌にも及んでくることが予想される。もちろん短歌の方面は、俳句よりも長い、そして強固な伝統の世界であるだけに、俳句におけるより何倍ものエネルギーを要するのである。

さて子規が七部集との出会いによつて悟つたものは、己の生活、己の足元である。短歌の世界では、ひたすら王朝の美意識を信じて模倣に明け暮れて来た子規には目の覚めるようなショックであつたろう。したがつて七部集との邂逅は、俳句への影響よりも短歌への影響が大きいと見てもよいほどである。

明治二五年

鶯のねくらやぬれんくれ竹の根岸の里に春雨そふる

水鳥のうきねのとけき春の日に桜ちる也しのわつちの池

隣にも豆腐の煮ゆる音すなり根岸の里の五月雨の頃

この二五年になると、対象に留まり詠もうとする態度がかなり確立しているように感じられる。「水鳥の」歌は、古今集の「久方の光のどけき春の日に」を本歌にしたところもあるが、「桜ちる也しのわつの池」は、紀友則の「静心なく花の散るらん」に比べると貫禄負けである。「隣にも豆腐の煮ゆる音すなり」は、俳諧の世界である。豆腐は王朝の和歌には絶対登場しない。それを素材とし、さらに「煮える音」まで詠んだことは、まさに革命的なことであったのである。根岸には驚よりも豆腐の方がつかわしいのである。前年の七部集との出合いがいかに大きいかを示している。しかしまだこの傾向のものはわずかであった。やはり数の上から言えば観念的なものが目立つ。

むれあそふ足の下より氷るらん水鳥さわく不忍のいけ
海原は見渡す限り山もなしいづこをさして白帆ゆくらん

観念の世界へついつい流れてしまう手法がいかに根強く子規の中に定着していたかを示している。子規の中古の和歌への心酔の程がわかる。

この二五年、子規は大学を辞め、日本新聞の記者となり、俳句に打ち込むことになった。その結果、俳句創作の分量は従来何十倍にも達している。そのことが、短歌にも現れている。

足引の山は緑に賤が家の卯の花白しなけ郭公
子規

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けどもあかすまた鳴かんかも

読人しらず(新古今、卷三、夏)

両者を比べると、「山」「卯の花」「ほととぎす(郭公)」は共通で

ある。したがって両者の目指す世界は、極めて近いといえる。詠みあげる題材によつて(つまり用語)歌の目指す美は決定される。子規が新古今集の題材に止まるかぎり、新古今集の亜流にとどまる。たとえ子規の作品が新古今集を凌駕しても、子規は明治二二年以後、用語の拡大を革新のキーワードとしたのは、彼の長い中古和歌の模倣の経験からである。

子規の「足引きの」歌は、そうは言っても、新しい芽も備えた一首である。「賤が家」を取り入れたのは破格の冒険である。また子規は、「緑と白」のコントラストを導入し、新古今集よりも意欲的である。子規は俳句で「配合」を唱えたが、その源は、案外新古今集の模倣にあるかも知れない。

明治二六年

この年の作品集は三〇首あまりである。

いつのよの庭のかたみそ賤か家の垣ねつつきに匂ふ梅かか
上の句の「いつのよの庭のかたみそ」の詠み出し方は観念的であるが、下の句「賤か家の垣ねつつきに匂ふ梅かか」は、現実味がある。いささか俳諧的であるとともに、新古今調でもあるが、子規としては前進しているプロセスにある。新古今集の要素と俳諧の要素の結合が始まったと見るべきであろう。

この年子規は芭蕉に倣つて奥州の旅に出る。そうして「はてしらずの記」を書き上げた。その中の短歌が主なるものである。

下つけのなすの原の道たえて覚束なしや撫子の花
草茂みなすの原の道たえて撫し子咲けり人も通はず

名所歌的などころもあるが、子規の目が次第に対象に定まってきたのは確實である。那須野は古歌に詠まれた歌枕であるが、そこを尋ねたところに子規の積極性が感じられる。またこの経験は病臥してから、宝となる。

浪の音の闇もあやなし大海原月いつるかたに嶋見えわたる

夕されば吹浦の沖のはてもなく入日をうけて白帆行く也

これら二首には古いものと新しいものとがせめぎあっている。

「浪の音の闇もあやなし」は中古の常套句である。下の句は大袈裟だが、写生に近づいている。「夕されば」も、下の句に見る詩人の片鱗がうかがえる。

ところでこの旅の道中、松島あたりで鮎貝槐園という人物と出くわす。子規は槐園から和歌革新の必要性を説かれ、万葉に学ぶ必要があることを教えられた。子規はそのとき、「自分は和歌のことは研究していないからよく解っていないが、この頃では古今集が面白い」と語ったという。

さてこの年にも、何首かが、本歌取りの形で作られている。

とくとくの谷間の清水あつめきて巖をくたく滝の白玉 子規

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかると雪の玉水

式子内親王（新古今集、巻一、春）

見し夢の名残も涼し檐のはに雲吹きおこる明かたの空 子規

春の夜の夢の浮橋とだえて峰に別るる横雲の空 藤原定家

（新古今、巻一、春）

これらについては依然として新古今集の世界が目指されているのが一目瞭然としている。歌そのものはかなり完成度が高いが、本歌

の域からは出ていない。子規の歩みは行きつ戻りつの状態であるのが分かる。

なおこの二六年、三月―五月にかけて、子規は、日本新聞に「文界八つあたり」を発表した。その中で、短歌について次のように述べている。

「要するに今日和歌といふものは価値を回復せんとならば、所謂歌人（即ち愚痴なる国学者と野心ある名利家）の手を離して之を真成詩人の手に渡すの一策あるのみ」と述べている。当時の歌人といわれる人々が実力でなく、彼らの地位や名声の上で作歌していることへの批判を表明している。この考え方は三一年の「歌よみに与ふる書」に継承されるのはいうまでもない。しかし具体的にどうすれば短歌を革新しようかという考えにまでは至っていない。

二六年の暮れから翌二七年の正月まで日本新聞に載せた「芭蕉雜誌」の中で和歌について触れているところを少し見ておこう。

「美術文学中尤高尚なる種類に属して、しかも日本文学中尤之を欠く者は雄渾豪壯といふ一要素なりとす。和歌にては、万葉集以前多少の雄壯なる者なきにあらねど、古今集以後（実朝一人を除きては）毫も之を見る事を得ず、真淵出でて後稍万葉風を模擬せりと雖も、近世に下つて纖巧細膩なるかたにのみ流れ、豪宕雄壯なる者に至りては夢寐だに之を思はざるが如し。」

実作の上では依然として古今集以後の伝統的な線上で作歌していた子規であったが、その作歌活動を通しての反省が、こういう形で出て来ていると見てよからう。古今集、新古今集を本歌とした歌をいくつ重ねても、自己の納得の行かない状態にある反省が、このよ

うな激しい発言をもたらしたのであろう。

明治二十七年

棚橋に駒たておれば薄月夜梅がか遠く匂ふ夕暮

子規

駒とめて袖うちらはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮

藤原定家(新古今、巻六、冬)

一見全く異なつたように見えて、内容的には、共通するところがある。子規の歌では、春の薄月夜の中、馬を止めて梅の香りを求める人(子規)の姿が浮かび上がる。定家の歌では、雪、雪、雪の中に、馬を止めて、自然と一体になつてゐる。そう見ると、両者ともに幽玄の世界を目指していると言へるのではないか。子規の新古今集への傾倒はなまやさしいものではなかつたのではなからうか。子規の新古今集の模倣は模倣の域を越えている。

子規の下の句、「梅がか遠く匂ふ夕暮」は、俳諧の世界でもある。子規の今後は、新古今集と俳諧の世界との弁証法的発展(アウフヘーベン)があることが予想される。

米洗ふ賤が門辺のいささ川瘦せてぞ咲ける花杜若

この歌は、大筋では三句切れ、体言止めの新古今調である。しかし細かく見て行くと、新古今集には出て来ない言葉がちりばめられている。それは「米洗ふ」と「瘦せて」である。王朝和歌にはなかつた世界が混入してきている。しかも意外にそれらの卑俗なものとは花杜若と調和するのである。このような詠みぶりが三一年以後の革新につながって行く。新古今集には「賤が圍生」の例がある。

とにかくこの歌は、俳句の好んで取り上げる情景であり、子規自

身の視点が定まつている。子規が足元の現実を写そうとしたのである。「瘦せてぞ咲ける花杜若」は対象への切り込みが鋭い。

なおこの年の重要な出来事として、画家中村不折との出会いがあった。そのことがすぐに短歌の上に現れてはいないが、子規のものの見方、考え方などに影響をあたえることになる。それがやがて明治三〇年以後の短歌革新の素地を形作るのである。

理論面ではこの年には、かなり進んだ境地に達する。この二七年七月の「文学漫言」を見ておこう。まず万葉集について次のように述べる。

「当時の人は質樸にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにあらず、只々思ふ所感ずる所を直に歌となしたる者と思しく、何れの歌も真摯質樸一点の俗気を帯びず。固より平々凡々の歌多かれども時には雄壮勁健なる者あり。語淡にして旨遠き者あり。今日に至りて猶絶調と言はるる者少なからず。其平凡の者と雖も後世の巧を弄して却て失する者に比すればはるかに数等の上にある。」

古今集については次のように述べている。

「万葉の如くむくつけき言葉無き代りに壮大の者もなく幽玄の者も無し。試みに古今集を繙きて見よ。開巻第一の歌、年の内に春は来にけり一年を去年とやいはんことしとやいはん、と言へるは単に言葉の上の洒落にして何等の趣味をも含まざるにあらずや。」

以上の言及を見ると、理論的にはあと一押しで明治三一年の「歌よみに与ふる書」に達しそうなところにまで来ている。子規が十数年にわたって手本または本歌としてきた古今集、真古今集の中古的な美世界をいくらか模倣を繰り返しても、そこに生まれてくるものは

中古の垂流にしかすぎないことをはつきりと自覚しつつあることがわさる。ことに古今集巻頭の「年の内に」の歌に投げかけた批評は激しい。既に三一年の「歌よみに与ふる書」のレベルにある。こう見てくると、子規の三一年の理論と実践は唐突に出て来たものではない。既にその根はこの二七年の活動の中にしつかりと張り巡らされていた。

また「文学漫言」の中でも、短歌の進むべき方向について触れている。「曰く先ず改良の第一着としては和歌俳句の調和を謀らざるべからず。其調和を謀るには先づ和歌の言語に俳句の意匠を用ゐるを以て第一とす。和歌の言語とは単に雅語を用ゐ古文法を用うるの謂に非ず。俳句の意匠とは固より俗情を穿つの謂に非ず。一言にして之を云はば三十一文字の高尙なる俳句を作り出さんとするに在るなり。他日を俟て詳論すべし。」

ここで注目すべきは、子規は俳句の成果を短歌に全面的に導入しようとしていることである。「改良の第一着」として「俳句の意匠」の採用を提唱している。先に触れた「米洗ふ賤が門辺のいささ川やせてぞ咲ける花杜若」は、まさにこの提唱のもとに生まれた作例と見ることができよう。三一年の「百中十首」の実践は、この線上にあると私は考えている。

ところで藤川忠治氏は、その著『正岡子規』の中で、この「文学漫言」と実作とについて、「まだ（子規は）実作者としての体験は乏しかった」上での論としているが、決して実作者の体験に乏しいのではない。それはこれまでの考察から分かる。私は、子規のこれ

らの言葉はむしろ長い豊かな体験からの発言と見たい。もちろんそれは「桂園派の実作」ではある。

明治二八年

この年は五〇首ほどの短歌が作られた。二五年以降では最も意欲的な年である。

見わたせばもろこしかけて舟もなし霞につづく春の海原 子規
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮 藤原定家

（新古今、巻四、秋）

いずれも初句は同じで、二、三句は子規では「舟もなし」、定家では「花も紅葉もなかりけり」。四、五句は、子規では春の景色、定家では秋の景色である。しかし定家の目指したもの、子規の目指したものは、極めて近いのではないか。子規は新古今集の世界に深く入っていた。新古今集が子規の血肉になっていたことを示していた。

すまの浦に旅寝しをれば夏衣うら吹きかへす秋の初風 子規

秋風の関吹き越ゆるたびごとし声うち添ふる須磨の浦波

壬生忠見（新古今、巻十七、雑）

「すまの浦に」は、新古今集の「秋風の」を本歌としている。子規は、本歌では「秋風」が初句にあるのを、五句目に「秋の初風」と変えて置き、本歌五句目「須磨の浦波」を初句「すまの浦に」としている。本歌では「浦波」が中心であるが、子規では「秋の初風」が主体である。また子規は、「旅寝しをれば」と自己を詠み込んでいる。新古今集では、作者の存在は姿を消しているかに思われる。

本歌の取り方について「近代秀歌」(定家)などによれば、「取つた歌句は一首全体の中で本歌と異なつた個所に置くことが望ましい」「四季の歌を取つて恋や雑の歌を詠むというように、本歌の主題をすつかり変えることが望ましい」(この項、新潮社日本古典集成・新古今集の解説から)としている。子規が本歌の語句を入れ替えているところ、また内容を本歌の「雑」を「羈旅」に変えているところなど、模範的本歌取りである。

風あるる伊勢の浦わの浜荻の枯れて音なき冬は来にけり 子規

神南備の三室の山の葛かづら裏吹き返す秋は来にけり

中納言家持(新古今、巻四、秋)

舟つなく三津の港の夕されば苦の上近く飛ぶ千鳥かも 子規

夕されば潮風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり

能因法師(新古今、巻六、冬)

子規の新古今調の詠みぶりは全く板についている感がある。新古今集の中においても不自然でないところまで達している。その意味では一つの頂点を極めたといえよう。子規の短歌を論じるとき明治三十二年以降に限定されるさらいがあるが、習作期の成果にも目を向けるべきである。

さてこの二八年においても、「らん」の使用が跡を断っていない。これまで述べて来たように「らん」が使用されると、どうしても現実から空想、観念に流され易い。現実を目を逸らさずじつと見据える重苦しさに比べると、「らん」へ向かう方が楽である。この年も、次のような例が見られる。

秋風のふくにつけても月の入る山の端いかにこひしかるらん

見ればたた尾花風吹くむさししの月入る方や限りなるらん

右の二首を見ても分かる通り、「らん」が入ると、どうしても現実をはかしてしまふ方向へ歌をまとめてしまふ。この「らん」の結びと対照的なものは、「見ゆ」である。じつと一つの対象に視線を据えて、それから目を逸らさない態度を伴う。子規の三一年以後の活動の土台は、この「見ゆ」に移るのである。この年には、二首の歌に「見ゆ」が登場した。

むさし野をさまよひ居れば上つ毛の赤城の山に雪ふれる見ゆ

すまの浦やいそうつ波のおと絶て松の木末に白帆行見ゆ

この二首に登場する「見ゆ」の意義は大きい。長い長い模索の末にたどり着いた新境地である。しかしそれでもまだ子規は新古今集の影響をひきずつている。(以下次号に続く)

(会員 平成一〇年七月例会講演を補足)

子規会報 第七九号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成一〇年十月十九日

発行 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇一六二〇一七一八六八

電話 〇八九九二五〇三三八

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴 堂 本 舗

TEL 089 (941) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ
四季の移り変りを楽しめる露天岩風呂
で一句ひねってみませんか。
政府登録国際観光旅館



春日園

ホテル

〒790-0836 松山市道後鷺谷町3-1

☎ (089) 941-9156

お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

新
刊
案
内

河野氏の歴史と道後湯築城

川岡 勉 著 B6判 250頁 定価1,500円

自費出版

お気軽にご相談下さい。
編集からお手伝いさせていただきます。

印刷 & 出版

(有) 青葉図書

〒790-0036 松山市小栗6丁目3-23 ☎ 089 (943) 1165

お一人様から参加できる

四国八十八ヶ所順拝

予約受付中

— 伊予鉄本社ビル出発 —

★ 平日遍路 / ★ 日曜遍路

発心した月から一年で満願（毎月出発）

1回目 ~ 6回目 日 帰 8,500円 / 9,000円

7回目 ~ 12回目 1泊2日 23,000円 / 24,000円

★ 一国まわり 3泊4日 61,000円

阿波一国 出発日 3/11 5/19 9/15

土佐一国 出発日 5/11 9/19 11/15

伊予一国 出発日 3/15 9/11 11/19

讃岐一国 出発日 3/19 5/15 11/11

★ 四国八十八ヶ所順拝（全周）

11泊12日 198,000円

出発日 3/1, 3/20, 4/1, 4/8, 4/25

5/8, 5/20, 6/5, 7/5, 8/1

9/5, 10/5, 11/5

12泊13日 218,000円（高野山含む）

出発日 3/1, 4/10, 5/10, 9/10, 10/10, 11/10

お問い合わせ、お申し込みは——



伊予鉄道株式会社 伊予鉄順拝センター

〒790-0012 松山市湊町4丁目4-1

電話 (089) - 948 - 3114